

じゅうぎゅうず ふえふきどうじ きぎゅうきか
奉納 十牛図石像『笛吹童子騎牛帰家』



令和6年7月1日に、法圓寺参道入り口に、篤志家の希徳な法縁によって、みごとな一枚岩に刻まれた『笛吹童子騎牛帰家』石像が「黄金天神ゆかりの法圓寺」に御奉納さいいただきました。

この「母子牛と背に乗り幸せそうに笛を吹く兄とそれに寄り添う妹の二童子の石像」には、十牛図の『笛吹童子騎牛帰家』のモチーフである、安らぎと平和な暮らしの糧を手にした童子が妹とともに、母牛と子牛とともに、家族の待つ我が家に戻る姿を現しており、その主題は「世界のすべての子供たちに幸福な人生がもたらされますように」という尊い誓願がこめられたものとして有り難くお受けいたしました。

法圓寺は創建当初からこうした願いとともに、世界中の全ての生きとし生けるものが安らかな人生を送れますよう誓願を起こす寺として代々継承されてきておりますから、いまこのときにこそ天より授かった、貴い尊像として勧請死後安置申しあげました。

みなさま、どうぞ、御来寺の折にはこの聖牛に親しんでいただき、法圓寺の本不生の門を開かれ、光り輝くものの神泉に触れていただければ幸甚でございます。

解説

その1、「母子牛とその背に乗り笛を吹く兄と妹の二人の童子の石像」について

仏教では、「牛」はしばしば「法」または「仏教の教え」を象徴し、「童子」は「その教えを求める者」を象徴することがあります。

「笛を吹く」行為は、「ブツダのころと同調している天真爛漫なころでいること」をしめします。ブツダのころを追求し、理解し、あらゆる人と分かち合う重要性を示します。

また、「童子が牛に乗り笛を吹いている」像は、「禪(如実知自心=自己をあるがままに見つめる)の修行段階」を表す「十牛図」じゅうぎゅうずという十枚の絵のひとつでもあります。

今回奉納された「母子牛とその背に乗り笛を吹く兄と妹の二人の童子の石像」は十牛図の

中で六番目段階の「^{きぎゅうきか}騎牛帰家」を主題とするものです。

この「騎牛帰家」は「悟りを求める過程、即ち自己を見つめる如実知自心」を表現し、「童」は「現在の自己」を、「牛」は「本来(本不生)の自己」を表します。童(いまの自分)は牛(本来の自分)を見失い、長い迷いと苦悩の放浪の旅を経て、漸く「ついに牛(本来の自分)を見つけ出し、帰宅の途につき」ます。

童子は「もはや牛を制御する必要もなく、無碍自在に操る天真爛漫な境地」に至り、悠々と笛を吹きながら天地感応を楽しんでいます。

このように「笛吹童子騎牛帰家」は、「心の自由を手に入れた人間の境地」を表しており、人生における重要な段階と見なされています。

さらに大切なことは「母子牛とその背に乗り笛を吹く兄と妹の二人の童子の石像」石像は「子供たちの幸福な人生を願って」一枚岩に刻まれたものであることです。古来より、中国や日本の家庭ではこの「笛吹童子騎牛帰家」の図を子どもに健やかな人生のお護りとして絵をお祀ることもありました。

奇しくも現代世界に繰り広げられている天災や人災、戦争や疫病、搾取され、蹂躪されるかけがえのないのちをどのように護り、痛ましい悲惨な出来事を鎮め、二度とくり返さないために、人類が失ってはいけない慈悲の心をあらためて示してくれているものでしょう。

いまこのときこそ大切に失ってはいけないものを、この「騎牛帰家石像」は示してくれているようです。

「親より賜った不生の仏心ただ一つをまもりぬき、幸せな人生をきずいていくことの重要性を示す」このかけがえのないものとして、まさに天より授かったものとして大切にしていきたいものです。

その2、仏教における「牛」の意味について、一般的仏教の意味について、その主なものをあげます。

- 一、法の象徴：牛はしばしば「法」または仏教の教えを象徴します。
- 二、仏の象徴：仏教では、お釈迦さまなどの仏さまは、しばしば牛にたとえられ「牛王」と呼ばれています。お釈迦様のお名前はゴータマシツダルダと申しますが、その「ゴータマ」とは「神聖なる牛の王」という意味です。
- 三、悟りの象徴：宋時代の中国では、牛が仏教における悟りの象徴とみなされました。
- 四、善行の象徴：お釈迦さまの前世の物語『ジャータカ』には、牛が善行を積む象徴として描かれています。

これらは、いずれも仏教の教えや悟り、善行の大切さを強調しています。

その3、仏教における「童が笛を吹いている像」で、童が笛を吹く行為は、仏教の教えを広めることを象徴します。

また、童は純粹さや無垢さを象徴し、笛を吹く行為は音楽を通じた教えの伝播を象徴するこ

とがあります。音楽は言葉の壁を超え、人々の心に直接響く力があります。したがって、この像は仏教の教えがすべての生き物に平等に届くことを願っています。

4、『十牛図』とは、そもそも何でしょうか。

十牛図は、中国・北宋時代の禅師、廓庵かくあんが創作したものです。禅の精神を学ぶための入門書として古くから重要視され、廓庵にならっていくつかの図が描かれました。日本においては室町時代の画僧「周文しゅうぶん」が描いたと伝えられる十牛図しゅうこくじが相国寺に伝わっています。十牛図は、逃げ出した牛を探し求める牧人の様子を、段階的に描いた十枚の絵です。

十牛図は、中国の禅宗仏教の教義と修行の段階を表現した図画です。この図は、牛を通じて、禅の修行者が悟りを開く過程を描いています。

各図の禅家の解釈については以下のとおりです。

尋牛じんぎゅう：仏性の象徴である牛を見つけようと発心したが、牛は見つからないという状況。

見跡けんぜき：経や教えによって仏性を求めようとするが、分別の世界からはまだ逃れられない。

見牛けんぎゅう：行においてその牛を身上に実地に見た境位。

得牛とくぎゅう：牛を捉まえたとしても、それを飼いならすのは難しく、時には姿をくらます。

牧牛ぼくぎゅう：本性を得たならばそこから眞実の世界が広がるので、捉まえた牛を放さぬように押さえて

おくことが必要。

騎牛归家きぎゅうきか：心の平安が得られれば、牛飼いと牛は一体となり、牛を御する必要もない。

忘牛存人ぼうぎゅうぞんじん：家に戻ってくれば、牛を捉まえてきたことを忘れ、牛も忘れる。

人牛俱忘じんぎゅうぐぼう：牛を捉まえようとした理由を忘れ、捉まえた牛を忘れ、捉まえたことも忘れる。

返本還源へんほんかんげん：何もない清浄無垢の世界からは、ありのままの世界が目に入る。

入廬垂手にってんすいしゅ：悟りを開いたとしても、そこに止まっていたは無益。再び世俗の世界に入り、人々に安らぎを与え、悟りへ導く必要がある。

このように、十牛図は、自分の心に分け入る旅に出ることでもあります。

法圓寺ではこれを「あるがままの自己凝視」「内観」「如実知自心」「五相成身観」としてとらえて、本不生の神泉より刻々と湧きいずるいのちの源流を汲んで、自心が光り輝くものとして生きることを探求心を表します。

